

# 言いたい ほうがたい

二〇〇八年から続けているベトナム枯葉剤被害者支援の旅に、今年も出かけてきました。ハノイからバスで一時間半ほどの所にあるハンディキャ

ップ・チルドレン村という施設を中心に活動しました。施設では仲間の音楽療法士による訓練、眼科検診、そして子ども達との交流を行いました。

六歳から十六歳までの障害を持った子ども達四

十一人が施設に住み込み、保育園から小学四年生までの様々な教育、訓練を受けていました。炊事場をはじめ、衛生面では、まだまだ不十分と思われ、支援できる部分の多さを痛感しました。

十一人の息子と、母一人子一人の家庭でした。七十三歳の母親は関節痛、高血圧に苦しみながら、一人きりで家事、農作業、レビカメラが持ち込まれ、六人の連れを伴って、チェオン・クオン・ハイ人民委員会副会長が同席されたのです。挨拶の中でハイ副会長は、こう語

## 連帯

名古屋 良輔

被害者の家庭を、今年も三時間ごとの体位交換も、二十、二十四時間休む暇がありません。自分が死んでしまえば、息子の地区（人口十九万人）だけ、三千人の枯葉剤被害者がいる。戦争が終わった

六歳から十六歳までの障害を持った子ども達四、中でも心に残ったとか支援をできないもの、これほど心のこもった

挨拶は、かつて無かったことでした。その疑問も通訳の解説を聞いて氷解したのです。

彼は、こつも語っていたのです。

「私は一度、広島に行ったことがある。原爆の被害者の様子を見て、日本はベトナムと近いと思った。日本とベトナムは助け合っていくべきだ。今こそ、連帯が必要だ」

これからの日本の進路を考える上で、とても大切な言葉だと私は思ったのです。

（眼科医、原）